

「森のかみさまの話」

ゆっくりと物語が開始に向かう。
奥から話し声が聞こえる

阿形 「なんか来たね。」

咩形 「ね。」

阿形 「真昼間に。」

咩形 「営業かな。」

阿形 「営業だったらお断りだぞ。」

咩形 「リストラかな。」

阿形 「リストラかもね。」

咩形 「困ったときの神頼みってか。」

阿形 「困るんだよね、頼りにされちゃ。」

咩形 「って聞こえてないっつーの。」

2匹 「あははははは。」

♪森のかみさまの話♪

それでは、始めましょうか。

かみさまは一人で住んでいた。

昔は妖精とか、小人とか、

そんな類の人じゃない、動物でもないものが、この森にも居たのに

今はもう、かみさま一人。

誰も居ない森の中で毎日、

もてなしの準備をするかみさま。

いつかやってくる、そう、隣人の存在を信じて。

時には笛を鳴らし、時には詩を詠み、時には歌を歌い、ずっと待っていた。

ある日、その客人は突然やってくる

曲を遮るように

全員 「森のかみさまの話」

暗転

明転

夕焼け

立派な鳥居が現れる。鳥居の前でたたずむ吉田の後ろ姿。ゆっくりとそれでも確実に、日が暮れ、あたりは真っ暗になる。

吉田が登場

阿形 「あ、あいつだ。」

咩形 「あ、昼間の。」

阿形 「戻ってきたんだ。」

咩形 「にしても疲れてるね。」

阿形 「ね、やつれてるね。」

咩形 「しんどそうだね。」

阿形 「ね、ちゃんと食べてんのかな。」

咩形 「こいつ、この時間に会社もどるのかな。」

阿形 「もう真っ暗だよ。」

咩形 「でも、スーツ着てる。」

阿形 「考えてるね。」

咩形 「ね、考えてるね…。」

阿形 「まさか…」

阿形 「え、うそ、まさか！」

阿形 「ありえるーありえるよー」

阿形 「あー。だめだめだめだめ。」

阿形 「だめです、お兄さん、考え直してください！」

阿形 「うーん、聞こえてないよ」

阿形 「なに、考えてんだろ。こいつ…。」

阿形 「…まさか。」

阿形 「見てる…。」

阿形 「見てるね。」

阿形 「…ねえ、こいつさあ…」

阿形 「…え。」

吉田 「聞こえてるよ、全部。」

声 「聞こえてるよ、全部。誰の声だって聞こえてる。風のうわさも聞こえてる。」

阿形 「嘘。」

阿形 「嘘じゃない。こいつ、聞こえてる。」

声 「目に見えないものも、耳を澄まさなくていいものも、本当は全部聞こえている。だからこうやって与えられたものだけを、机の上で黙々と、黙ってこなす毎日なんだ。」

吉田 「馬鹿じゃない。」

声 「馬鹿じゃないから目にも見える。」

吉田 「馬鹿じゃない。」

声 「だから、馬鹿のふりをする。」

吉田 「ばかばかしい。」

吉田 「仕事別に嫌いじゃなんだけどなあ…。」

全員 「嫌いじゃない。」

さっと、姿を消す狛犬たち

♪TOP ダンス♪

会社 チャイムの音

ダンスを一瞬で中断し一斉に昼休み休憩に入る社員たち

それぞれの方向に、昼休みを過ぎしに行く。

一人はお弁当を持って

一人は財布を持って

携帯を持って

財布を持って

吉田は一人

吉田 「営業行ってきまーす。」

吉田 「…営業、行って、きまーす」

かみさま 「聞こえてるよ、全部。」

吉田 「…ん？」

かみさま 「聞こえてるよ、全部。返事が君に届いていないだけだ。」

吉田 「…んん？」

かみさま 「聞こえてるよ、全部。」

吉田 「…ちえっ。」

かみさま 「いってらっしゃい。」

社員たちバラバラな方向から現れ吉田に一言ずつねぎらいの言葉を残し去っていく。彼女たちは吉田に一枚ずつ名刺を渡していく。

一人は、「お疲れ様。」

「あ、お疲れ様です。」

一人は、「いつもありがとうございます。」

「はい、当社におきましては…」

一人は、「たまには休めよ。」 「いえいえ、滅相もございません。」
一人は、「彼女作れよ。」 「すぐに資料を届けに参ります。」

「吉田君、プリンター直しといて。」

「あと、電球もおねがーい。」

でも、吉田には届かない。

吉田は、きわめてステレオタイプな営業マンの演技をする。

吉田 「まーた、こんなにもらっちゃったよ…。」

吉田、名刺を一枚一枚、トランプのように並べ、舞台上に一本の道を作る。その様子は、七並べをする子供の様にも見える。その道は、鳥居の中に続いてい

吉田 「…あれ。こんなところに、鳥居なんかあったっけな…。」

鳥居に気が付いた吉田は久しぶりに空を見上げる。

吉田 「夕日が…綺麗だな。」

ゆっくりと、自分がつくった道をつたい、森の中に入っていく吉田。

その様子をじっと見ている人の狛犬。

阿形 「行けよ。」

阿形 「そっちが行けよ。」

阿形 「あー入っていく。」

阿形 「ようこそーい。」

阿形 「言ってる場合か！行くよ！」

阿形 「かみさまーい！」

阿形 「かみさまー！ー！」

阿形 「やばい、久しぶりに走ったから明日絶対筋肉痛…」

咩形 「何年犬やってんの。」

阿形 「何年って、狒犬は走らないでしょう、普通。」

咩形 「筋伸ばしたら、ほら、行くよ！」

(狒犬、吉田がつくった名刺の道を拾いながら去っていく。)

かみさまは一人で待っている

かみさま 「やっと来たね。」

吉田 「…。」

かみさま 「待っていたよ。」

かみさま 「あんた、名前は。」

吉田 「…吉田…です。」

かみさま 「吉田…。」

吉田 「僕がここに来ることが、わかっていたんですか。」

後を追いかけてきた狒犬たち

阿形 「かみさまー。」

咩形 「あ！」

阿形 「え！」

阿形 「お前！」

咩形 「足、速！」

咩形 「かみさま、こいつ、私たちのことわかるみたい！」

吉田 「あ、さっきの！」

咩形 「…ほら！」

かみさま 「おお吉田、こやつらのこと見えるのか！？すごいな！偉い！偉いぞ吉田！」

吉田 「夢ですか、これは。いやおかしいな。とうとうおかしくなっちゃったのかな。」

阿形 「なんだ、こいつ。」

かみさま 「さっきから、お前とかこいつとかうるさいぞ。客人に対してなんだその口のきき方は。ちゃんとご挨拶しなさい。」

阿形 「阿形です。」

阿形 「阿形です。」

吉田 「あ、どうも、吉田です。え、うん g y…？」

阿形 「あー、なんて説明したらいいのかな。ほらよく神社とかで見かけますよね、狛犬。」

吉田 「ああ。」

阿形 「その類です。」

阿形 「口を閉じている方が阿形で、開けてる方が阿形。」

吉田 「ああ、阿形の呼吸の！」

阿形 「そうそう！」

阿形 「まあ、実際、ズーっと口を閉じているわけでも、ズーっと開けているわけでもないんですけどね。」

吉田 「え？」

阿形 「そりやそうですよ。だったら、見ざる言わざる聞かざるの猿たちはいつまでも、見えないまんま、言わないまんま、聞こえないまんま、ってことになっちゃいます。」

阿形 「手をどけなくちゃ。自分で自分の瞳を押さえつけて、見えない見えないなんて、おかしい話です。」

阿形 「そりやそうだ。聞こえていない格好をしているだけで、本当のところ、あいつは誰よりも耳がいいんです。」

阿形 「だからあれですね、もうついには口をふさいでいるかのように見えてしまいます。だけれどもそれも違う、誰かの作った幻想です。」

吉田 「…いよいよおかしいぞ、これは。」

阿形 「ところで吉田さんは…あの、これ非常に聞きにくいんですが…あれですか、あなた、リストラかなんか…。」

吉田 「いえ、違います。」

阿形 「あ、そうなんですか。あー良かったー…いやねえ、本当に思いつめた顔してたから。」

吉田 「そ、そうですか。でもね、よく言われるんです。もともとこういう顔なんですけどねえ。」

阿形 「じゃあ、どうしてこんな山奥に？」

吉田 「うーん。どうしてでしょう。僕にもよくわからないんですけどね。なんか、こんなところに鳥居ってあったかなーって。毎日通っている道なんだけど、今まで気づかなかったなーって。」

かみさま 「なんだなんだ、そのよそよそしい会話は。…え、なんだって？吉田君…今、なんていったかね、吉田君…君…とと鳥居が見えたのかー？すごい！偉いじゃないか！え！！」

吉田 「なんなんですか。この人。」
かみさま 「あ、私？」
吉田 「ええ。」
かみさま 「あ、私、神様です。」
吉田 「…え？」
かみさま 「か・み・さ・ま。」
吉田 「…正直に言っ、とつても胡散臭いです。」
かみさま 「だけでもだけど、君には我々が見えているんだろう。」
吉田 「はい。」
かみさま 「君の眼に映った我々が胡散臭いのならば、吉田、それは、考え方が逆だ。胡散臭いののは君だよ。それにほら、聞こえているんだろう、我々の声が。」
吉田 「吉田、君は今我々と会話をしているんだろう。」
かみさま 「それは、そうですが…。」
吉田 「君の脳が出している指令を、何故身体の方で否定しようとするのかね。」
吉田 「…。」
かみさま 「それ…。」
阿形・咩形 「それ、一番しんどいパターンだよ。」
吉田 「一番しんどいパターン…。だめだ、混乱してきた。」
かみさま 「混乱させているのは、吉田、君自身だ。」
吉田 「うううう…。」
阿形 「かみさま、ちよつと落ち着いて。展開が速すぎる。」
咩形 「そうだよ。ほら見て、苦しんでるよ。」
阿形 「まずはこいつ…吉田君の話の聞こう。」
咩形 「なんかいいやつそうだし。」
阿形 「ね！」
咩形 「ね！」

「その日によるに起こった出来事を今まで僕は誰にも話したことがない。話をしたところで僕はうまく説明が出来ないので、きっと信じてくれる人なんていないだろうし、僕自身も信じがたい話だからだ。だけど、僕はその山に、次の日もでむくことになる。その山は一步入ればまるで森のようだった。もともと日本には山と森の差異がそんなにないのだけれど、あの場所は山のように険しく、森のように穏やかだった。」

もっとも、営業先から会社に帰ろうとしていた僕は、おかしな鳥居をくぐり、おかしな生き物たちがいる森へ迷い込んだ。普段の僕からしたら考えられない。仕事をほっぽり出して、だ。あの時の気持ちはうまく言い表せない。いくつかの自分が混じりあった。そんな気分だった。

その前の日、僕は妹と喧嘩をした。僕たち兄弟は昔から仲がよくはなかった。なんでも自分の好きなようにして生きている妹が、僕は許せなかった。あいつには責任つてもんがない。社会や世の中からの責任を放り出し、自由気ままに生きていこうなんて、甘すぎる。世間はそんなに甘くないし、こうやって汗水をたらしながら、くだらないと思いつつも頭をさげて社会に貢献している大人がいるからこそ、経済はまわっているんだ。それなのに、やりたいことを好きなようにして、自分のしていることを自由だの個性だの偉そうに言うやつは大嫌いだ。だから僕は、妹が大嫌いだ。

ちやうど鳥居の前を通りがかった時、あの夕日に染まる鳥居を見て、心が穏やかに透き通っていくと同時に、その前日に感じた妹に対する怒りを思い出した。

こんなに穏やかで満たされた優しい気持ちと、人をここまで毛嫌いする気持ち。そんな両極端な二つの感情が自分の中に湧き上がり、僕はなかなか立ち尽くしてしまった。

こんなにも種類の違う感情が同じ人間の中からあふれ出てくるなんて。自分の中にいるもう一人の大きな存在から突然声をかけられたような、そんな気がした。

森の中でかみさまたちと話しているうちに、遠い昔のこと、家族のこと、ずっとずっと遠い記憶、もしかしたら僕がこの世に生まれる前の、この魂だけを持った誰かの…だけど確実に僕の中にある記憶…それらを一気にそれも一夜のうちに、全て思いだした気持ちになった。だけど、それがなんなのか、その時の僕にはよくわからない。もちろん、その時の僕には何もまだ、見えてはいなかった。

森を出て、家路についた僕は、なんだか自分が浦島太郎になった気がした。家の前に立っても、これが本当に自分の家なのかと疑うほどだった。しかし、残酷なほどにいつも通り、翌朝になると日が昇り、恐ろしいほど習慣的に僕はスーツを着て、会社へと向かっていた。」

「次の日、僕は何年ぶりだかわからない有給届を出した。」

「なに、吉田さん病気—？」

「この時期に突然休むって…ねえ。」

「どうしたのかなあ。」

「心配だよねえ。」

「うっそ、もしかして鈴木さんって吉田さんのこと…」

「やだー！違うから——」

「あはははは。」

「そんなんじゃないってばー。」

吉田 「…はあ。」

かみさま 「なに、会社の皆にいやがらせでもされたか。」

吉田 「いや、そんなことする人はいないけど。」

かみさま 「なんだ、いい職場じゃないか。」

吉田 「でも、絶対裏では言ってるはずなんだ。僕が休みを取ったことに対して、色々噂話をしているに違いないんだ。」

かみさま 「なるほど。」

吉田 「そして、次に行った日は『吉田さん、どうしたの大丈夫？』だとか、心にもない白々しいことを言ってくるんだ。きっと。なんて会社だ。」

かみさま 「なんて会社だ。って君が勤めている会社だろう。」

吉田 「そうだけど、そんな思われとかないっすよ。大体、あの女の独特の雰囲気だめんだ。あ、うち今の部署がほとんど女なんだけど。」

かみさま 「いいじゃないか、ハーレムじゃないか羨ましいぞ、かみさまは。」

吉田 「いやだいやだ、あの女の集団で群れるというか、噂をするというか、一人じやなにもできないくせに、集団になった途端大きな声で嫌味を言うところとか。」

かみさま 「吉田、君は女についてなにか誤解をしているね。」

吉田 「誤解なんかじゃない。いやなんだ。あんなやつらと働くのが、一緒にされるのが、前は良かった。前の部署は男ばかりで、ちゃんと評価されて。それが移動した途端これだ。僕が希望をしたんじゃない、会社の意向なのかなんなのかしらんが勝手にこうなった。僕は悪くない。」

かみさま 「何を言っとるんだ。誰も吉田が悪いなんて一言も言っていないぞ。」

吉田 「言っているさ。昼休みになればすぐ噂話だ。それも僕の。男の。電球を変えたり、機械を直したり、重いものを運んだり、そんなことが僕の仕事なんじゃない。」

かみさま 「おお、吉田、いいぞ。なんだかわからんがいいぞ。どこでスイッチが入ったのかわからんけど、いいぞいいぞ。その調子で全部吐き出してみなさいな。」

吉田 「大体、何で女は定時に上がって良くて、男は直帰したら悪いんだ。なんで、外回りのあとにわざわざ会社に帰ってきてあいつらが壊したプリンターを直さなくちゃならないんだ。女子更衣室の前を通っただけで、なんでそんな目で見るんだ！なんで、女性専用車両はあるのに、男性専用車両はないんだ！間違えて女性専用車両に乗っただけで、犯罪者に向けたような罵声を浴びせられる。満員電車では、痴漢の冤罪におびえてびくびく両手をあげて乗る。先に中に入っただけで『日本の男は…』なんて言われる。映画館もレンタルショップも居酒屋も、何かにつけてレディースデイだの、女

子会割引だのつて週のほとんどが女性特待デイじゃないか。そのくせ生理だからイライラする。そんなもんがイライラの原因なんて許されるかと思ったら、会社も『生理休暇』を与える始末。何なんだ、この世の中は。大奥だ。今や、平成の大奥だ。

♪女♪稲荷ダンス♪

「女性専用車両」

「女子更衣室」

「レディースデイ」

「スチュワードス」

「女子高生」

「生理休暇」

「看護婦さん」

♪

突然、艶かしい音楽が流れだし、稲荷が登場する。できれば暖簾をくぐってほしい。

和服の端切れをまとった稲荷は最初は吉田をからかうものの、やがて女狐に変身し吉田を誘惑する。

それを肴に晩酌しているかみさまは、舞台の端に腰かけている。

吉田の嫌いな女である。

嫌がる吉田に、稲荷は絡んでいく。

吉田

「嫌い嫌い」

吉田

「やめてくれ」

稲荷はもとに戻っている

吉田

「お前もだ」

かみさま 「いかんよ、いかん。そんなことを言っちゃあ。女の子には、優しくせんと。」

吉田 「かみさままでそんなことを言うの？ かみさま位、平等でいなさいよ。」

かみさま 「何を言ってるんだね。」

稲荷 「平等って、吉田さん、あたしたち、生まれた時から不平等なのよ。」

吉田 「あ？」

稲荷 『『あ？』だって。こわい、こわい。』

かみさま 「お、よしよし。」

稲荷 「そんなにカリカリしてちゃ、しわが増えちゃうよ。」

吉田 「話になんねえな。」

稲荷 「何をそんなイライラしてるの。」

吉田 「嫌いなんだよ。」

稲荷 「何が。」

吉田 「女が。」

かみさま 「でも、君、この娘が見えているんだろ。」

吉田 「また始まったよ。『目に見えているものが信じられないのなら、それは自分の脳を信じていないのと同じだ。』でしょ。」

かみさま 「その通りだ。そしてわたしは聞いているんだ。『吉田、今、君には、この娘が見えているのか』と。」

吉田 「残念ながら。」

稲荷 「ねえ、吉田さんさあ、何で有給取ってまでこの森にくることにしたの？ ねえ、なんで。」

吉田 「なんで知ってるんだよ。」

稲荷 「だって、いたから。」

吉田 「いつ？」

稲荷 「いつって、ずっと。」

吉田 「ずっとって、いつから？」

稲荷 「やーだー、質問返しー！！」

吉田 「からかうなよ。」

稲荷 「いたよ、ずっと、昨日もいたよ。」

吉田 「でも見えなかった。」

かみさま、『見える、言わせる、聞かせる』のポーズ

吉田 「聞こえなかった…」

稲荷 「でも、今は見えてるんでしょ。うれしーい！」

吉田 「いやあ…まあ、はは。」

かみさま 「お、照れてる、照れてる。」

吉田 「照れてないやい。」

稲荷 「そうなの？可愛い！」

阿形 「その時の吉田の気持ちは、まるで初めて女性を意識した中学生のようだった。もちろん、吉田にだってそれなりの経験はある。初恋もしたし、初体験も、それなりの時期にそれなりのタイミングで済ませている。しかし、どの女ともなぜか長続きしなかった。だって女は」

吉田 「嘘つき」

咩形 「で」

吉田 「揚げ足取り」

咩形 「で」

吉田 「すぐ友達に言う。」

阿形 「からだそうだ。」

咩形 「それからなんとなく、面倒なこととして女性関係を絶っていた吉田にとって、このたび配属になった女性だらけの部署は地獄そのものだった。毎朝下を向いて誰とも顔を合わさないように出社し、昼間は外回りになる。そして、夜、皆が仕事を終えて帰ったところに職場に戻り、残った仕事をする。だからと言って朝はゆっくり出社するなどということはしなかった。皆と同じ時刻、むしろ気持ちはやめに出社していた。なぜなら」

吉田 「人と違うことをすると、女はすぐに噂をする。」

咩形 「からだそうだ。」

阿形 「この日、吉田は久しぶりに女と話をした。なつっこく自分の話を聞いてくれて尻尾を振ってくれる稲荷に対し、どう接したらいいのかわからず、ただただ、はにかむのが精いっぱいだった。」

吉田に晩酌をする稲荷

稲荷 「そうなんだ、じゃあ、英語はペラペラ？」

吉田 「まあ、日常会話程度は。」

稲荷 「すごーい！」

吉田 「まあ、それがしたくて今の会社に入ったようなもんだし。」

稲荷 「貿易のお仕事？」

吉田 「そう。前の部署では英語で取引もしてたし。」

稲荷 「すごいーい三三三と、貿易関連のお仕事がしたかったってこと？」

吉田 「いや、そんなわけではないけど…英語を使えたらそれでいいかな。って。」

稲荷 「ふうん。」

吉田 「えっと、あなたは…」

稲荷 「なあに？」

吉田 「えっと…やとめきます。」

稲荷 「なによ、ほら、もうちよつと飲んで、なんでも聞いていいんだよ。」

吉田 「(一気に飲み乾し) ああ、その、あなたの『稲荷』ってのは、えっと、『お稲荷さん』の…」

稲荷 「そうだよ。あつたりーー！」

かみさま、遠くで嬉しそうに拍手を送っている。

稲荷 『お稲荷さん』だよ。近くにもあるでしょ。」

吉田 「え…ああ！あるある！近所の神社の境内に。そうだ…昔よくそこで、妹とあそんだもんだ…」

稲荷 「妹さん、いるんだ。」

吉田 「ああ、うん。いますよ、一応。」

稲荷 「どんな子？可愛い？あたしより、可愛い？」

吉田 「まっさか三三三ぶつさいくですよ見た目も、中身も。それに…」

稲荷 「それに？」

吉田 「…女だ。」

稲荷 「そうね。そりゃ、妹さんだもんね。男だったらびっくりしちゃうよね。」

「いや、そう意味じゃなく…。あいつも女なんです。なんていうかな、女特有の…いやね、僕だって女の人みんながそうだと知っている訳じゃないんですよ。ただね。女ってやつはあれでしょ。すぐに『女だから』ってことを理由にしたがるでしょ。あいつもそうなんです。結局自分のことしか考えちゃいない。責任ってもんがないんだ。女だから許されると思って、今まで散々好き放題生きてきたかと思ったら突然結婚するからって家を飛び出して…。」

稲荷 「そっかそっか。大変だよな。」

吉田 「大変ですよ三三三残されたこっちは…」

稲荷 「いや、吉田さんじゃなくて。」

吉田 「は？」

稲荷 「妹さんが。」

吉田 「あいつは、いつも好き勝手に、人に迷惑をかけて生きていくだけだから、あいつの人生が大変だろうがそれでなかるうが、僕にとっては知ったことじゃないんですよ。」

稲荷 「そうかもしれないけどさ。吉田さんさ、さっき、『女だから許されると思って』って言ったでしょ。」

吉田 「言いましたよ。言いましたとも。」

稲荷 「でもさ、本当にさ、妹さん、そう思ってるのかな。」

吉田 「どういうことですか？」

稲荷 「妹さんはそうやって『女だから許されると思って』って周りのみんなに思われているのを知っているながら、その上で、自分のしたいことをしているんじゃないの。」

吉田 「何を言っているんですか。妹ですよ。あいつがそんなところまで考えているなんて、考えられないな。」

稲荷 「でもさあ、ちょっとうらやましかったりして。吉田さん。」

吉田 「誰が誰を？」

稲荷 「吉田さんが、妹さんを。」

かみさま 「吉田が、妹を。」

かみさま、
狛犬が吉田に見える

吉田 「あ、かみさま。いつの間に？え、人もいたの？」

かみさま 「ずっとおったよ。ここに。」

吉田 「突然現れないでよ、びっくりするから。」

かみさま 「だからずっとおったと言っているだろう。どうだ。吉田、一回ご両親と話をしてみないか。」

吉田 「何を言出すんだ突然すぎるよ。」

かみさま 「じゃあ聞くが、吉田はなんで、有給を取ってまでこの森に来たんだね。自分を変えたいからだろう。昨日の夜そう言ったよねえ。そうだったよねえ。『かみさま、僕、このままでいいのかよく分からなくなってきたあ。』今のこの気持ちの正体を知りたいんだ。』って言っていたよねえ。だから見えてきたんだろう。いろんなものが。聞こえてきたんだろう。自分の話をしていくうちに。だから、もう一度この森にきたんだろう。」

吉田 「わからない。」

かみさま 「何が？」

吉田 「どうしたいのか、どうなりたいのか、どこに行きたいのか。」

稲荷 「その答えが、もっと明確に、妹さんには見えてるだけだわ。」

吉田 「それは、女だから…」

阿形 「女だからかもしれない。」

昨形 「末っ子だからかもしれない。」

かみさま 「吉田より恵まれた環境に彼女はあったからかもしれない…あ、妹も吉田か…」

稲荷 「だから言ったじゃない。人間は生まれた時から不平等なんだって。」

吉田 「そんなの…」

かみさま 「しかし、それで吉田が卑屈になる必要は全くない！それは、妹は関係ない」吉田、君自身の問題だ」

吉田 「わーーーーわかってるよ、そんなことだから、何で親と話さなきゃなんないんだ」

かみさま 「何かあるからだよ、そこに。原因が。」

吉田 「どうやって話すんだよもう、居ないのに」

どこからか聞こえてくる蝉の音

だんだんと暗くなっていく

蝉の音に子供の泣き声が重なる

子どもの泣き声と蝉の音が聞こえる。気が付けば、かみさまも稲荷もいない。吉田はこの森に一人ぼっちになっていた。遠くから、父と母の声が聞こえる。

母 「お兄ちゃんは大丈夫だけど、この子はねえ。」

父 「そうだな。しばらくの間、綾子だけでも…」

母 「お兄ちゃんがもうちょっと大きかったらねえ。」

父 「仕方がないだろう…」

母 「だいたいあなた、どうしてこの時期なの。」

父 「知らないよ、会社に聞いてくれよ。」←☆このあたりから泣き声SDだんだん大きく

母 「とりあえず、私は一週間だけ向こうに居て、すぐこっちに帰りますから。お兄ちゃんは良くて、この子はまだ赤ちゃんなんだから。」

阿形

「あの日の記憶が一気に吉田の中に駆け巡った。かみさまの言っていた原因とやらが少し頭をかすめたが、そんなことよりも、久しぶりに悲しくて悲しくて涙が止まらなかった。あの日、ふすまの向こうで両親は、これからの旅路を前に、妹の心配ばかりしていた。そのまま自分たちが帰らぬ人となるなんてもちろん知る由もない。だけど、吉田はなんとなくそんな気がしていた。これが父と母の最期の姿ではないだろうか。」

吉田

「いってらっしゃい。」

咩形

「この世に絶対などない。現にあの時母が言った『絶対にすぐ戻ってくるからね。』と言う言葉は、一瞬のうちに嘘となってしまう。父や母が安心して眠れるよう、自分はしっかりしなくてはいけない。『お兄ちゃんは大丈夫だから』と言われたからには、大丈夫な姿を見せなくてはいけない。高校受験、大学受験、就職、誰に言っても恥ずかしくない程度に結果を出してきた。それが今の吉田の全てだった。」

やがてあたりは夕焼けに染まる。

妹登場

♪哲学者たちの歌♪

「ソクラテスと

プラトンがいて

アリストテレス

みーんな、知っていた。

みーんな、気が付いていた。

夜のとばりは降りてきて

ゆっくり鼻歌歌ってた。

大きな隕石落ちた時

ゆっくりこの世が傾いた。」

曲中で出てくる稲荷

妹

「お兄ちゃんへ……。ってかあ。」

稲荷

「なんだ、書いてるんじゃない。」

妹 「一応ね。」

稲荷 「えらい、えらい。」

妹 「うん…。」

稲荷 「付き合おうか、練習。」

妹 「え、いい。てか、やだ。」

稲荷 「なんでー。」

妹 「読むかどうかすらわかんないし。」

稲荷 「読むでしょふう。一番いいシーンなんだから。」

妹 「一番いいシーン？」

稲荷 「結婚式でさ、花嫁が、涙をこらえながら。…ほら、考えただけで泣けてきた！」

妹 「いやあ…。」

稲荷 「ほら、読んでみ。」

妹 「ええー。」

稲荷 「ほら。」

妹 「…結婚式、お兄ちゃん来てくれるかなあ。」

稲荷 「へ？」

妹 「あたしがお兄ちゃんだったら来たくないもん。」

稲荷 「んん？」

妹 「こんな妹の結婚式。」

稲荷 「…。」

妹 「でも、来ちゃうんだろろうなく。お兄ちゃん。あの人、性格的に。」

妹と稲荷は舞台の外へ

同じ舞台にかみさまと吉田

徐々に夕日が月日に変わる

かみさま 「究極論だよ。究極論。この娘が言っているのは究極論だ。」

吉田 「…え？」

かみさま 「それならどうかね、君が休んでいる間に会社が倒産でもしたら。」

吉田 「そんなことできるのかみさまだから?」

かみさま 「いやあ、例えばの話だよ。」

吉田 「そりゃまあ、つぶれちまえって思うことはあるけど、本当につぶれられるとな…。うちと契約している企業さんもたくさんあるわけだし…。」

かみさま 「ほう…。吉田、君は優しいね。」

吉田 「何を言っているの。月夜のせいかな。さっきまで見えていたのに、今はかみさま、あなたの姿も見えないや。」

かみさま 「でも、聞こえているんだろう。」

吉田 「うん。聞こえている。」

かみさま 「話しているだろう。」

吉田 「うん…。ねえ、どうして、皆いなくなるの。僕を置いていくの。」

かみさま 「誰もいなくなっちはいいよ。」

吉田 「かみさまだってそうじゃないか。居たと思ったら突然消えて、消えたと思ったら、突然聞こえて。」

かみさま 「それは、吉田、君自身がざわわざわわしているからだ。」

吉田 「ざわわざわわ?」

かみさま 「月を見てごらん月を。この間夕焼けの美しさに気が付いたように、月を見ていれば、何か見えてこないか、聞こえてこないか。」

吉田 「月…」

吉田はける

かみさま、ゆっくりと転換させてから、去る。

♪ブルームーン♪

妹が踊る。不思議な夜だ。

ゆっくり暗転

「幕終了

吉田

「かみさまー！ー！」

「かみさまー！ー！ー！ー！！」

明転

かみさま、自分の足の爪を切っている。

吉田

「かみさま」

かみさま

「なんだなんだ。」

吉田

「かみさま！僕！」

かみさま

「どうした、そんなに慌てて。」

吉田

「僕、家来になりました」

かみさま

「家来だって？！」

吉田

「そう！これで、やっと僕も一人前の男になりました！」

かみさま

「…一人前の男だって？！家来が。はっ笑わせよって。とんだ、勘違いだ。君は、何がそんなに面白い。」

吉田

「どうしてかみさま、あなたはどうして喜んでくれないのですか。僕は、家来になれて、こんなに幸せなのに。」

かみさま

「幸せ？！家来になることがか。君の頭はどうとういかれちまったんじゃないのか。」

吉田

「なにを言ってるんです、家来になれば、いろんな国につれて行ってもらえるし、そうだ！お金だってもらえる！」

かみさま

「お金…お金か。そうか。君はもつとこう…もういい。そうか、家来か。それはそれは、おめでどう。」

吉田

「家来を…家来をそんな風に言わないでください。僕のようなやしい家の人間は家来になれたことだって、誇るべきことなんです。」

かみさま

「なにを嬉しそうに。本当に、君…君には…がっかりだ」

吉田

「あなたにはわかりません。こんな生まれで、皿洗いしか能のない僕が、家来になれて…。」

かみさま

「もうたくさんだ」

かみさま

「いいか、君、よく考えるがいい。」

吉田

「考えるって何を。」

かみさま、去って行ってしまおう。

残されたのは吉田ではない。観客はそう思うだろう。吉田とは違うどこか違う時代の違う国の子どもがかみさまと出会い、森の中で泣いているのだらう。(衣装もスーツの上に何か羽織っていてもよい)しかし、それは吉田の姿であり、吉田の身体なのである。

吉田の形をした子供は一冊の本を見付ける

星の明かりで本に書いてある文字を読む

吉田 「これは、いつか、誰かの記憶。しかしながら確実に、この身体に宿る記憶。記憶。記憶。記憶の影を追いつけると、ごく稀に、本当に偶然に、どこか誰かの記憶にたどり着くことがある。そして、その記憶が、今のこの身体を癒してくれることがごく稀にある。」

吉田 「インド、ラダックのチョグラムサルに、かつての自分の前世を記憶している少女がいるらしい。生まれる前の両親も、自分がどうして亡くなったのかも、全て記憶している少女がいるらしい。」

吉田 「この世の中には、科学では説明のつかないことが山ほどある。しかし、科学の力で解明できたことだけを信じたがるのが人間だ。人間は弱い。弱いから強がる。強がるから、よけいに怖くなる。しかし、自分の中から湧き上がってくるこの解明できない何かに耳を傾けた時、人間は少しだけ柔らかくなれる。このタイミングでお前の中に出てきたこの記憶も、お前の力になるべくして、当然のようにお前自身の中から、出てきたのである。」

声 「私は知っている。」

吉田 「…だれ？」

声 「壁はどこにあるのかを。そして、外では生きていけないことを。だから、私はこの中で浮遊している。」

吉田 「…透明。」

声 「宇宙は透明である。透明のカーテンの内と外、どちらが宇宙なのかは誰も知らない。そして、誰もが、今自分は宇宙にいると勘違いしながら生きている。」

「誰もが宇宙を、浮遊している。」

「君の行きたい所はどこだ。」

「君の生きたい場所はどこだ。」

「君の宇宙はどこだ。」

「どこだ。」

「どこだ。」

「どこだ。」

狛牛登場

吉田 「君は？働きたい？」

狛牛、首を振る

吉田 「みんなは？働きたいの？」

狛牛 「…？」

吉田 「僕は毎日お城で皿を洗うのが仕事さ。毎日、毎日ね。毎日お皿を洗って、お金なんかもらえやしない。寝床と、食事にありつけるだけだよ。それがね、今朝、家来になることが出来たんだ。」

狛牛、ふいと横を向き、寝転がってしまった。

吉田 「すごいと思わないの？僕、家来になれたんだよ。」

狛牛 「思わないね、まったく。なんでそんなに君が働きたいのかも、正直はつきり言って理解不能だ。」

吉田 「ひどいな…」

狛牛 「ひどいのは君の方だ。そんなことを聞くために私を呼び止めたの？」

吉田 「…。」

狛牛 「仕事・仕事・仕事。」

吉田 「だって、そうじゃないか？仕事をしないと？僕には何もない？誰もいない？だから自分で稼ぐんだ。」

狛牛 「じゃあ、働かなくてよかったら？」

吉田 「…。」

狛牛 「稼がなくなってもよかったら？」

吉田 「…。」

狛牛 「あふれるくらいのお金と、あふれるくらいの時間があったら？」

吉田 「ないのにな？」

狛牛 「馬鹿だなあ。想像の話だよ。」

吉田 「想像の話…」

狛牛 「べつに、想像だったら、お金もかからないでしょ。お金だけじゃなく、迷惑もかからないよ。想像はね、唯一人間に与えられたご褒美なんだ。」

吉田 「ご褒美…」

狛牛 「人間は働くからね。牛とは違う。だから、何を想像してもいいっていうご褒美があるんだよ。」

吉田 「あふれるくらいのお金と、あふれるくらいの時間があったら…。」

狛牛 「そう。ちよっと、楽しくなってきた？」

吉田 「…本が読みたい。」

「だから…文字が読めるようになりたい。」

「勉強がしたい。」

「人間の身体がどうなっているのかを知りたい。」

「この世の中が、地球が、宇宙が、どうなっているのかを知りたい。」

「…地球はね、本当は丸いんだよ。」

「地球が丸い？」

「君の生きている時代より、もっとあとの人類が発見する。だけど、間違いなく、地球は丸い。」

「でも、今はまだ楕円でしょ？」

「ううん。今も丸いよ。君の生まれる何百年も前から地球は、綺麗な球体をしているんだ。」

「…すごい。」

「君の想像もしていない事実がこの世にはまだまだ沢山あるかも。」

「…家来では何も教えてもらえない。」

吉田

狛牛

吉田

狛牛

吉田

狛牛

吉田

狛牛

♪理想の宴♪

♪

あっちむいてほい

やっている間に

あっちむいてほい

気が沈む。

ただの勘だけど、

私の勘はよくあたる

ただの勘だけど

またいつかどこかで会える。

宇宙の果ては小さくて

狭い未来が広がっている

頭に咲いた小さな花は

青虫と友達となって、心の闇を食べつくす。

あっちむいてほい。

やっている間に

あっちむいてほい。

♪ あっちむいてほい。

突然明るい音楽が鳴る

吉田（ここでは吉田ではない誰か）の心を揺さぶる音楽

吉田 「だからさ。」

狛牛 「うん。」

吉田 「僕さ。」

狛牛 「うん。」

吉田 「でも…。」

狛牛 「ここに書いてごらんよ。言葉はすぐ嘘をつく。だから、消えてなくならないように、ここにちゃんと文字にして残しておくんだ。」

狛牛と吉田は大きく紙を広げ、ペンで何かを書き出す

♪宇宙♪（ピアノ・「理想の宴」リブ）

ゆっくりに暗くなる

暗転

明転

舞台上で横になっている吉田と狛牛。

教科書が一つ

後ろには大きな鳥居。

吉田 「さっむー。いやいやいや、なんて夢だ。」

狛牛 「なんだ、なんだ？」

吉田 「あれ？」

狛牛 「あ、初めまして。」

吉田 「あ、ですよね。吉田です。」

狛牛 「こんなところで寝ていたら、風邪ひいちゃうよ。私はいいんですけどね。牛だから。」

吉田 「牛…ですか。」

狛牛 「はい、牛です。あ、牛と言ってもね、一応かみさまにお仕えしているんだよ。ほら神社とかにいるでしょ。」

吉田 「狛牛ですか？」

狛牛 「ピンポーン。そうです。ドナドナの牛ではありませんーん！」

吉田 「…もう驚きません。そして、もう突っ込みません。」

狛牛 「ねえ、吉田さん、帰らないの？」

吉田 「ああ、ね。帰ろうかなとも思ったんだけど、こうやって一日森に居たら、何か帰るのめんどくさくなっちゃって。ここで寝ちやおうかなーって。」

狛牛 「ああ、わかります。」

吉田 「わかります？」

狛牛 「めんどうだよ。なんか、考えるのって。吉田さん、肩こってるでしょ。」

吉田 「あ、わかります？」

狛牛 「わかります…なんか、肩こり顔なもの。」

吉田 「いや、まあ、こんな顔なんですけどね。」

狛牛 「吉田さん…考えすぎなんだよ。」

吉田 「え、考え過ぎ。」

狛牛 「あ、そうだそうだ。これなーんだ。」

狛牛、教科書を吉田に見せる

吉田 「ああ！それ、えっと、いつのだったかな。」

狛牛 「高校〇年の時に吉田さんが使用していた教科書です！」

吉田 「えー、なんで?!」

狛牛 「さっき走って取ってきました。吉田さんの実家、意外とここから近いんですね。」

吉田 「はあ?!」

狛牛 「ウソです。」

吉田 「ああ?!」

狛牛 「まあまあ、ほれほれ。見て見て。」

吉田 「わあ…。懐かしいな。あ、舞姫だ。」

教科書をめくる吉田

狛牛 「舞姫ねえ、エリスのね。」

吉田 「そうそう懐かしい…。…これこれ、登場人物の心情なんて、わかんないっつーの。」

狛牛 「しいて言えば？」

吉田 「時代がそうさせた。ってね。タイミングだ。つとかね。…ああ、そうそう。そう解答欄に書いたら怒鳴られたな。」

狛牛 「え、え、誰がどなったの？」

吉田 「当時の担任。まさかの担任が国語の教師でさ。現代文、一番苦手だったのに。」

狛牛 「へえ。」

吉田 「『お前は、文系の頭じゃないから、理系科目を捨てちゃダメだ。』なんて半ば強引に理系の道に…。」

狛牛 「そうなんだね…え、今、理系って言った？」

吉田 「はい、言いました。」

狛牛 「え、でも今やってる仕事って貿易関係だよね…」

吉田 「そうそう、まわりはエンジニアとか研究職とかを勧めたんだけど。『工学部卒なのに、そんな誰でもつける職に就くのか。』って。さんざん言われな。」

狛牛 「なるほど。それでも。」

吉田 「…英語…かな。」

狛牛 「いいね、いい顔してる。」

吉田 「え…いやっでも…ちよっと待って。なんで僕のこと知っているの？」

狛牛 「だっていたから。」

吉田 「いたってどこに？」

狛牛 「まあいいじゃん。私たちもかみさまに御伝えしている身だからさ。神出鬼没ってことで。」

吉田 「よくわからないな。」

狛牛 「分からなくていいんだよ。なんでも答えを出そうとしたら、しんどいよ。」

吉田 「ああ…。」

狛牛 「うんうん。」

狛牛、教科書を指さす

吉田 「え？」

吉田 「…。」

吉田 「え？あ、これ？舞姫…。」

吉田 「うんうん。そうそう。答えなんかわかんないんだよ。誰も。」

吉田 「選択肢に答えがないんだよな…。」

吉田 「作者…森鷗外の考えてたことなんかわからないよ」とかって思っちゃうんでしょ。」

吉田 「そう。だって、そうでしょ。結局作者の気持ちなんて、その人にしかわからないんだし、それを4つか5つかの選択肢の中から選ぶなんて絶対無理でしょ。」

吉田 「作者の気持ちっていうかそれ、問題の裏をかいちやうタイプだね。」

吉田 「もっと素直に答えろって何度言われたことか…。え、それが考え過ぎ？」

吉田 「そう…考えすぎだよ。明らかに…」

吉田 「解答题紙に答えを、書いては消し、書いては消し…」

吉田 「作者の考えなんて関係ないよ。問題は吉田さんがどう感じるかなのに。」

吉田 「どう感じるか？」

吉田 「だってそうでしょう。鷗外はそりゃあ鷗外なりの意見があって作品を書いているんだろうけれど、それを出版してしまっただけからは作品は作者のものではない。」

吉田 「どういうこと？」

吉田 「だから、作品、舞姫が作者、鷗外の手を離れた時点で、それはもう鷗外のものじゃないんだよ。そして、それはその作品を手にとった人のものである。」

吉田 「…」

吉田 「だってそうでしょう。離れちゃっているんだから。作品が、手から。ほら。」

吉田 「はあ…。」

吉田 「だから、吉田さんが人の思いを探ろうなんて、それは無理な話だよ。」

吉田 「人の思い…。」

吉田 「そんなの、どれだけ考えたって、吉田さんにはわからない。」

吉田 「わからない。」

吉田 「だって、吉田さんじゃないんだから…。」

吉田 「ああ…」

狛牛 「だから、自分じゃない誰かの心のケアを吉田さんがしようなんて、そんなの無意味なんだよ。」

吉田 「無意味って、そんな、失礼な。」

狛牛 「だって、それは、吉田さんのやさしさなんかじゃないでしょう。誰かを気にする前に自分を気にしなきゃ。」

吉田 「でも、気にならない？人が…特に身近な人が…自分に対して何を考えているか。」

狛牛 「気にならないよ。全く。発想の転換さ。吉田さんはとっても感受性が強い。その上、想像力がある。というか妄想に近いねこれは。だから人の目を避けて生活する。肩こりはそのせいだよ。」

吉田 「はぁ…。」

狛牛 「吉田さん、私の事見えているんでしょ？」

吉田 「うん…はい！」

狛牛 「それが、何よりもの答えだよ。」

吉田 「…。」

かみさま 「普段の吉田ならどうする？めんどくさいからって、こんな山奥で寝ちゃえ！って寝ちやう？」

吉田 「わぁ！かみさまか…まったく神出鬼没だよ。」

かみさま 「かみさまだからね。」

吉田 「寝ちやわない。絶対に。意地でも家に帰る。ってか大体こんな山奥に仕事を休んで来たりなんかしない。」

かみさま 「そうでしょう。そうでしょうとも。」

吉田 「何が言いたいの。」

かみさま 「吉田の心はだな…。君の身体とは違うことを思っている。」

吉田 「心？」

かみさま 「吉田、考えるのはどこだ？」

吉田 「ここ？」（頭を指す）

かみさま 「感じるの？」

吉田 「ここ。」（心臓を指す）

かみさま 「頭痛がするのは？」

吉田 「頭。」

かみさま 「ドキドキするのは？」

吉田 「胸。」

かみさま 「疲れたら休む。足りなかったら補給する。だ。」

吉田 「疲れたら休む、足りなかったら補給する…。」

かみさま 「吉田の中で今、疲れているのはどこだ？足りないのは何だ。」

吉田 「かみさま…僕何か聞こえてきた気がする。」

かみさま 「おお、何が、何が聞こえてきた？」

吉田 「足音だよ。」

遠くの方から聞こえてくる足音。

狛牛のゆっくりとした足音

稲荷の艶かしい足音

狛犬たちの急いだ足音

そして…

吉田 「父さん、母さん」

吉田 「父さん、母さん、どうして僕を置いていったの？ずっと、聞けなかった。どうして僕も一緒に連れて行ってくれなかったの。最後の日、妹をずっと抱っこしていたね。僕だっけぎゅっとしてほしかった。お兄ちゃんだからって、いつもなんでも後回しにされるのが嫌だった。僕だっけ甘えた29

った。父さんとキャッチボールしてみたかった。テストで90点とったよ。褒めてほしかった。お留守番ばかり嫌だった。

…あいつが勝手に泣き出したんだ3僕が泣かせたんじゃない4

…僕は止めたんだ5危ないからって。なのに、あいつが勝手に落ちたんだ6僕が見ていなかったんじゃない7

…僕だっけ、一緒に寝たかった。

…僕だっけ…僕だっけ…」

狛犬の急いだ足音

稲荷の艶かしい足音

狛牛のゆっくりとした足音

かみさまの足音…だけが聞こえない。

かみさま 「この夢、僕にあげます。」

吉田 「なに？」

かみさま 「この夢、獺にあげちゃえばいいんだよ。」

吉田 「なにを言っているの。」

かみさま 「君は、長い夢を見ている。そして、その夢にずっとうなされてる。そして、ずっと目覚めるのを怖がっている。」

狛牛 「ここには色んな動物がいる。」

稲荷 「狐も。」

阿形・吽形 「犬も。」

狛牛 「牛も。ウサギだって、猿だって、蛇だって。」

かみさま 「獺もね。」

吉田 「獺ってあの、夢を食べちゃう怪物？」

かみさま 「怪物だなんて、人聞きが悪いな。獺はな、悪い夢をみんな食べてくれるんだ。」

阿形 「だから太ってる。」

稲荷 「鼻は象みたい。」

吽形 「身体は熊みたいに大きい。」

狛牛 「わたしみたいに尻尾がある。」

かみさま 「こらこら、みんな知らないくせに適当なことを言うな。」

吉田 「え、みんな知らないの？」

かみさま 「獺は、誰も見たことがない。」

吉田 「なんだよ、それ。」

かみさま 「だけど、どうかね。君の悪夢を、獺にあげないか。」

吉田 「そんな、誰も見たこともないやつに、しかも“夢”なんていうあやふやなものを、あげるなんてなあ。何を言ってるんだか…。」

かみさま 「まあ、そう言いなさんな。」

吉田 「つかみどころのない話だ。」

かみさま 「じゃあ、言ってみなさいな。『この夢、獺にあげます』って。簡単だろう。」

…

吉田 「この夢…？」

かみさま 「そう。」

吉田 「この夢…」

「…ちよっと待って。夢ってなに？何のこと？」

稲荷 「こら。なんでも聞かないの。」

かみさま 「まあまあ。夢か…。吉田は何の夢を見ていたんだ。」

吉田 「え、今？」

かみさま 「今もずっと。もしかしたら、夢を見ているのかもしれない。」

「吉田、ご両親に言いたいことを言ったんだろう。『なんで？』ってたくさん問いかけたんだろう。」

吉田 「うん。」

「なにも、聞こえなかった。」

「なんにも、聞こえてこなかった。」

かみさま 「どうだ、その夢、獏にあげないか。」

吉田 「なんにも…」

「僕は独り言のようにつぶやいていた。」

「…だから、“夢”ってなに?」

ピアノの音。

聞こえてくるのは、妹の歌。

なあんだ。あいつも、同じようなことを思っていたんだ。

♪哲学者たちの歌♪

「ソクラテスとプラトンがいて

アリストテレス

みーんな、知っていた。

みーんな、気が付いていた。

夜のとばりは降りてきて

ゆっくり鼻歌歌ってた。

大きな隕石落ちた時

ゆっくりこの世が傾いた。」

妹と稲荷たち

“お兄ちゃんへの手紙”の練習をしている

吉田

「あいつが…まさか。」

「でも、あいつがそんなことを思うなんておこがましい。」

「あいつは、恵まれている。」

「あいつは、みんなに好かれている。」

「あいつは、痛い目にあっただことがない。」

「あいつは、何の苦勞もしていない。」

「不平等だ。」

稲荷

「わたしたち、生まれた時から不平等なんだよ。」

妹

「お兄ちゃん、本当に…」

吉田

「…はっ。」

吉田

「聞こえた…？」

かみさま

「聞こえない。」

かみさま

「まだ、何かが聞こえていない。」

かみさま

「まだまだ、まだまだだ。」

吉田は、見ざる言わざる聞かざるのポーズ

吉田

「僕はずっと、夢を見ていたんだ。」

「それも、いい夢じゃない、悪い夢を。」

阿形

「いやまてよ、あながち悪くもない。」

吽形

「むしろ、とっても心地いい場所。」

稲荷

「みんなが自分を可哀想だと思ってくれる。」

狛牛

「ふつうじゃなくて、気の毒ね。と言ってくれる。」

吉田

「…心地いい。」

かみさま

「どうだ、吉田、その夢、猿にあげるか？」

… … …

吉田 「…いやだ」

かみさま 「ならばお前は、一生変わることはできない。」

阿形 「ずっと、そのまま」

稲荷 「ずっと、女を憎みながら。」

狛牛 「自分を理解することなく。」

咩形 「ずっと不幸だと思い込んだまま。」

かみさま 「死んでいく。」

声とともにパタリパタリと倒れていく動物たち

かみさま 「吉田、君が今立っているのはどこか分かるかい。」

吉田 「地面。」

かみさま 「違う。」

吉田 「地球。」

かみさま 「違う。」

吉田 「森。」

かみさま 「違う。」

吉田 「コンクリート。」

かみさま 「違う。」

かみさま 「よく、下を見るがいい。もっと、ずっと、下。君が今ふんずけている、それだよ。」

吉田 「…？…う、わああああああ」

吉田 「な、何だこれ…し…死体の山だ…！」

かみさま 「やっと気づいたか。」

吉田 「どういうこと。こんなの、さっきまで無かった」

かみさま 「いや、違う。ずっとあったのさ。今、君に見えたただだ。ここは、死の森だ。」

吉田 「恐ろしい…。」

かみさま 「君は無数の死者の上に立っている。いいや、君だけじゃない。今、この世で生を受けている者はみんな、膨大の死者の上に立つ陽炎のようなものだ。実際考えてもみる、生きている数なんかより、死んでいった数の方がずっと多いだろう。つまり、今生きている人はみんな、誰かの遺族なんだよ。」

吉田 「誰かの、遺族…。」

かみさま 「君はその遺品の中から、感動を覚えたことはないかい。」

吉田 「なんだこれ…。」

かみさまは一つ一つ人形を整理するかのようになり、動物たちを並べていく

かみさま 「生きた時代も、場所も違うのに、彼らの遺品たちは現代の君の心を打っている。」

吉田 「僕の人生も、何世紀かあとに誰かの心を打つんだろうか…。」

狛牛 「それは、どうかな。」

♪ドラムの音がかすかに聞こえだす♪

吉田 「ああ、僕の孤独が、僕の思いが、誰かに伝わればいいのに。誰かに伝わったなら、その誰かと酒を飲んでみたい。朝まで解き明かされぬ宇宙の謎について語り合ってみたい。僕はもっと傲慢で、もっと自信に満ち溢れている。なのにもう、ありとあらゆるものが僕に迫ってくるものだから、僕は僕は…。人の影に自分を隠すことに慣れた僕は、こうやって今日もまた自分でひいたレールの上を歩く。暗くてほそいけれど、居心地がいい。そんなレールだ。だって、あの日から。僕はずっと、他の誰でもない自分自身がつくった地図の中をぐるぐると徘徊していたにすぎない…！」

阿形 「吉田が今見ている夢は、この夢が生まれた時から君の手中にはない。君の手の中にあるのは、もっと綺麗に鋭く尖った感性という名の欲望だよ。」

吉田 「うん。」

咲形 「どうやら吉田、足りないものを補給するときが来たのかもね。」

♪青竜♪

突如出てくる青龍たち。

戦い、踊る。

妹 「お兄ちゃんへ。」

「今まで私を育ててきてくれたお兄ちゃん。お母さんはいつでも、『なんでも分けっこして食べなさい。』と言っていたけれど、いつも少し多めに私にくれたお兄ちゃん。お父さんとお母さんが亡くなって、いつも自分のことよりも先に私のことを考えてくれていたお兄ちゃん。もっと、やりたいこともあったらうに。本当は、違う勉強も、もっとしたかったらうに、私のため、家族のためって大学を出てすぐに就職してくれて、毎日朝早くから夜遅くまで一生懸命働いてくれて、本当に…本当に…(どうも、ありがとう。お兄ちゃん、私はね、お兄ちゃんに本当に感謝しています。こんな時にしか面と向かって言えなくてごめんなさい。もっと、日ごろから口に出来ていれば苦労しないのにね。本当に、馬鹿だね。いつも、早くに家を出ていくお兄ちゃんの背中に向かつては(ありがとう)って、つぶやいていたんだよ。つぶやくだけじゃダメだって、ちゃんと言わなきゃダメだって、思えば思うほど口に出来なくて、気が付いたら、この日を迎えてしまいました。お兄ちゃんにとって私は、本当に甘ったれで、世間知らずで『女の子だから』…本当に自分のしたいことをしたいようにしてやってきちゃったから…本当に…本当に…邪魔で面倒な存在だったと思います。でも、それでも、いつも身体のことを気にして『早く帰ってこいよ』って言ってくれたり、私の将来のことを気にしてくれて『ちゃんと就職しろよ』って言ってくれたり…。でも、そのたびに私は、反発してお兄ちゃんを傷つけてしまっていたね。本当はお兄ちゃん(ありがとう)って思っていたのに、その言葉が出ず、代わりに汚い言葉でごまかしていたよね。…お兄ちゃん。本当に『ありがとう。』」

吉田 「あいつ…あいつが嫁に行く。」

遠くから聞こえる風鈴の音

吉田 「…父さん？」

両親の声

父 「ごめんな。父さん、もっとお前と遊んでやりたかった。なのに、いつもいつもお前の手本にならないと、という風に考えて、お前には厳しくあたっていたよな。寂しい思いをしていたのも、我慢していたのも父さん全部見ていたぞ。知っていたのに…。『偉いな』『よくやったな』…言っていたらな。いつも口にしように思ったら、変な邪念が入ってお前を叱ってしまう。もっといろいろなことを教えてやりたかった。こんな無念な感情だけが残るのなら、せめて最後の日、お前を力いっぱい抱きしめればよかった。本当に、お前はどこに出しても恥ずかしくない、俺の自慢の息子だ。勉強も仕事も、綾子のことも、誰の世話にもならずよくしてやってくれた。父親代わり、母親代わりになってくれて本当にありがとう。この声を、お前に届けることが出来たらいいのに…。お前は自分の思っていることを素直に表現できず、飲み込んでしまうところがある。それは、お前の優しさからくるものなのだろうが、私としては、もう少し、自分のしたいことをにこして誰かに話してほしい…。願わくば、将来、そんないい相手と巡り合ってくれたら…。と思っている。早くお前が安心して自分の好きなことに打ち込める環境になるよう、いつまでも祈っている。父さんはお前を、誰よりも、愛している。」

吉田 「あの父さんが…。」

吉田 「…母さん。」

母

「いつも、忙しいのを理由にして、あなたが話してくれる話を聞いていないふりをしてごめんね。もちろん、母さん、全部聞いていたわ。なのに、何て答えていいかわからなくて…。いつも綾子ばかり可愛がっているように…あなたには見えていたかもしれない。『お兄ちゃんだから頑張りなさい。』何度言ったことか…。私ね大学を卒業してすぐあなたを授かったの。…本当にうれしかった。うれしかったのよ。でもね、まわりの友達が、みんなまだ独身で、自由に遊んでいるところを見たら、なんだか自分がはじめに思えてきちゃって…。こんなね、自分の傲慢だつてこともよくわかっているのね。母さん、本当に手探りだった。自分のやってきたことに後悔はないけれど、あなたが傷ついていないかがいつも心配で…。でも、それを確かめるのが怖くて…。いいえ、本当は分かっていた…なのに母さん、何度もあなたが傷つくのをわかっている、いろんな言葉を投げかけてしまった…。本当にごめんね。ちゃんと毎日食べていますか。カップ麺ばかり食べてない？あなたが大変な時、いつも傍にいてあげられなくてごめんなさい。入試の日の朝も、綾子に朝ごはんを用意してから試験に向かっていたね。ごめんね。でもね、ちゃんと面と向かって言わなきゃいけないんだけどね…私、あなたを誰よりも愛している…。」

狛牛

「父さんも、母さんも、一人の人間だ。お前と同じように悩み、苦しみ、傷つきながら毎日を生きていた。」

吉田

「あ・り・が・と・う。」

狛犬・狛牛

「この夢、獺にあげます。」

青竜たちが、大きな獺に飲み込まれていく。

一瞬にして静けさを取り戻した舞台には、何かを悟った吉田がいる。

吉田

「父さん…母さん…綾子…。」

声(かみさま)

「ごめんなさい。」

吉田

「母さんが手をつなごう。って言ったとき、照れくさくて嫌だ。って断った。」

声

「ごめんなさい。」

吉田

「父さんの大事にしていたゴルフボール、庭に隠した。」

声

「ごめんなさい。」

吉田

「『うちの妹は出来が悪い』って、友達に言った。」

吉田

「ごめんなさい。」

声 「自分は不幸だと、ずっと思ってた。」

吉田 「…帰らなきや」

走る。

吉田の部屋。舞台の上には、その様子を見つめるかみさま。

吉田、アルバムを開く。

吉田 「やっぱり…綾子のものばかり。」

吉田 「違う。こっちじゃない」

吉田、もう一つの部屋へ。

吉田 「地球は…丸い…。」

一つの手帳を見つける

吉田の声に母の声が重なる。

吉田 「やっと、会いに来てくれました。私のもとへ、小さな天使がやって来てくれました。とても小さな初めてのわが子。どの子よりも可愛い。私の子。小さな手。小さな指。どれをとっても完璧に可愛い。テレビのコマーシャルにうつる赤ちゃんを見て。パパは『うちの子の方が可愛い』とご機嫌。どうか、この子の人生が豊かで、楽しいものでありますように。」

吉田 「豊かで、楽しい、人生。」

遠くの方で、何かが燃える音。

吉田 「…ん？」

窓の向こうには赤々と山が燃えている。

「山が山が燃えてる……」

「かみさま……」

吉田
「かみさま……」

「阿形……」

「咩形……」

「稻荷……」

「狛牛……」

かみさま、群舞から外れて

かみさま
「吉田「聞こえたか？」

吉田
「聞こえた……聞こえたよ……」

かみさま
「それは良かった。」

吉田
「どうなってるの？みんなは？」

かみさま
「火事だ。火事。」

吉田
「大丈夫なの……？」

かみさま
「みんな、燃えとるよ。」

吉田
「なんとかしてよ……かみさまでしょ？」

かみさま
「吉田は何を勘違いしてるんだ。かみさまは、何にも出来んよ。」

吉田
「なにそれ、何言ってるの。かみさまなんでしょ。」

かみさま
「そうだ、かみさまだ。」

吉田
「魔法とか使ってよ……」

かみさま
「だからかみさまだ。魔法使いではない。」

吉田 「なんとか出来るでしょ」

かみさま 「吉田、それは吉田が作り出した幻想だ。かみさまはな、こうやってそばにいることしか出来ん。」

吉田 「そんな…」

かみさま 「落胆させてしまったか？それはごめんね。」

吉田 「でも…でも、かみさまも居なくなっちゃったら、そばにいることもできないじゃないか！いなくならないですよ」

かみさま 「いなくならんよ。神出鬼没だ。」

吉田 「なに？じゃあ大丈夫ってこと？」

かみさま 「まさか、かみさまは死なないとも思っているの？それは、とんだ大間違い。」

吉田 「…。」

かみさま 「ずっとおるよ。死んでもずっとその中におる。」

吉田 「…。」

かみさま 「吉田、青竜に会ったか？大きくて強い、青くて優しい青い龍だ。」

吉田 「うん。」

かみさま 「足りないもの、補給できたか？」

吉田 「…うん。」

かみさま 「聞こえただろう。」

吉田 「過去。そして、それを否定する自分を捨てる勇氣。」

かみさま 「現実はいつも、やさしいよ。」

吉田 「でも…もう、いやだ。人と別れるのはいやだ。」

かみさま 「吉田、我々は人ではないよ。…かみさまだ。」

吉田 「吉田、この夢を、獮にあげたんだね。」

かみさま 「うん。あげた。まだ切ないほど名残惜しいけど。」

吉田 「ありがとう。吉田。」

かみさま 「ありがとう。」

かみさま 「ありがとう。」

各方面から聞こえる『ありがとう』の声。

狛犬たちの声、稲荷たちの声、狛牛の声、青竜の声、妹の声、父の声、母の声…。

どんどん燃え続ける火。
かみさまもやがて群舞に戻っていく。
山はいまでも、燃え続けている。

吉田
かみさま

「山はいまでも。」
「燃え続けている。」

あたりはだんだん暗くなり、やがて真っ暗になる。
まだ燃え続けている音だけが、客席にこだまする。
メラメラ…。

一人ひとり、出演者がとりいの中に帰っていく。
吉田を一人残して。

暗転
明転

声

「山は無くなった。木々は燃え尽き、平地と化した。
燃え尽きた山は灰になって、新しい森を作る。
再生された森は、またどこかの誰かを救うかもしれない。」

♪森のかみさまの話♪

♪それでは、始めましょうか。
かみさまは一人で住んでいた。
昔は妖精とか、小人とか、
そんな類の人じゃない、動物でもないものが、この森にも居たのに
今はもう、かみさま一人。

誰も居ない森の中で毎日、
もてなしの準備をするかみさま。

いつかやってくる、そう、隣人の存在を信じて。

時には笛を鳴らし、時には詩を詠み、時には歌を歌い、ずっと待っていた。

ある日、その客人は突然やってくる。♪

発行元 せんすおぶわんだあ

発行日 2017年9月17日

ご利用について

作品の上演などについては、WEBサイトのコンタクトよりお問い合わせください。

著作権は せんすおぶわんだあ に帰属します。

*本書の内容は予告なしに改訂となる場合があります。

WEB サイト せんすおぶわんだあ

<https://www.sens-of-wonder.com>

Twitter

@Sens_of_wonder